

「特別分科会：過労死防止啓発授業の現状と課題」

東京過労死を考える家族の会 中原のり子

私は「過労死等防止対策推進法」の制定後から、関東地方の高校や大学で、弁護士や研究者と共に、過労死についての啓発授業を担当しています。これまで早稲田大学や慈恵医大・獨協・上智・立教・法政・宇都宮・帝京・埼玉学園・都留文科大学ほか、浦和高校・正則高校、東葛病院看護学科などで実施してきました。

夫の過労自死の経緯から、「過労死等防止対策推進法」制定までの道のり、過労死家族会の状況などを総括的に伝えています。弁護士や研究者の方は、労働の歴史や労働法、労働者・経営者の権利と義務などの概要に加えて、過去の事例から意外な落とし穴なども紹介しています。授業の締めには「ぼくのゆめ」遺児の詩や歌、遺族の切実な思いは必ず伝えます。

学生たちの感想は、初めて過労死遺族の話に接して「ドラマより実感があり、理解が進んだ」とか、「労働法は難しく、すぐには理解できないこともあったが、今回は心に沁み」という感想を寄せてくれ、授業の印象については概ね【非常に良かった】【良かった】に印を付けています。以下に感想を列記します。

- ・「若い頃に寝る間を惜しんで働くことは必ず将来の糧になる」といった善意のアドバイスでハードワークを促すことは危険。
- ・「成功体験の押し付け」や「やりがい・成長」をえさにした経営者・管理職の強制的な労働の根絶は必要。
- ・新入社員であっても、皆で力を合わせていく大切さ（連帯）も理解し、強い心と柔軟な考え方を身につけ、自分に何が出来るかを常に考えていきたい。
- ・働き方改革の取組は重要だが、もっとシンプルに労働基準法の規制強化が必要だと感じた。
- ・過労死防止法や過労死白書の取組が、ようやくできたことに驚いた。

「過労死対策は遅すぎる！」等、多くの感想を頂きました。啓発授業を通して、やり甲斐のある貴重な経験を重ねる中で、私は衝撃的な現実と直面しました。学生の中には、過労死遺児であるわが子と同じ経験をし、同じ痛みを味わっている子がいたのです。その事実を知った時、私は言葉を失いました。

以下に 2 名の感想要旨を引用します。

「父は私が小学生の時に亡くなりました。原因は過労です。しかし、残業時間を完全に明記していなかったり、他の社員も同じように働いているのに生きているという理由で、裁判をしても勝てませんでした。とても理不尽です。父は、休日は死んだように寝ていました。心労も酷かったと聞きます。父の同僚は、会社から口止めされて証言してくれませんでした。一

流企業と言われる会社でも過労死がある事実心底嫌気がさします。もっと父と遊びたかったし、たくさん話もしたかった。父の思い出は、ほとんどありません。父親のいる家庭が羨ましいです。ある意味、人生を狂わされたと言っても過言ではありません。過労死をなくして欲しいです。（日本文学専攻）≫

「私は1歳の時に父親を過労死でなくしました。父親の顔など記憶は一切なく、物心ついた時から母と姉と生活していました。友人の父親を見て羨ましいと思ったり、父親が亡くなっている事を知られるのも嫌だった。父親の当時の様子は裁判を通して知りました。母から父の話を聞いて、子どもながらに「何でこんな に働かせるんだろう」「あまりに酷い」と思いました。結局、労災認定はされたが、父親がいないという事実 は変わらず、寂しさを胸に秘め、今日まで日々を送ってきました。労働環境を早急に改善して私たちのような家族をも増やしてはならない。私は強くそう思う。（父親と同じ医学専攻）≫

「過労死等防止対策推進法」が制定されて、過労死という言葉が社会に知られるようになり、勇気を持って伝えていこうという遺族も少しずつ増えてきました。しかし、若者の過労死事案が増えている状況をみると、この活動がまだまだ一部の人たちにしか伝えられていないもどかしさを感じます。世界に「karoshi」を発信つづける不名誉を、これ以上続けないために、政府も国民と一丸となって過労死撲滅のために早急に動くべきと考えます。

新型 corona 下で、若者たちがリアル授業と変わりなく zoom 啓発授業を受け入れているという手ごたえも感じます。過労死しないための働き方の真髓を、今こそ若者たちに伝えるべきです。長時間過重労働・ハラスメント・クレーム処理など負荷の多い職種。在宅リモート勤務が増え、高度プロフェッショナル労働制や裁量労働制、海外勤務の「特別加入制度」の実態、非正規労働者・フリーランス（個人事業主）の権利など多種多様な働き方の盲点をしっかりと社会に発信する必要があります。

遺族が沈黙すると、過労死などなかったかのように流れていくこの国の風土。「この悲しみを二度と繰り返してはならない」という遺族の強い気持ちと声をサポートし、未来につなげる体制が必要です。過労死等防止活動の最終目標に一刻も早く辿り着かねばならない。これ以上、悲劇を生み出してはならない。啓発授業に参加して改めて、自分の責任の重さを痛感しています。

以上